

地域力が 元気な富山を育む

県民一人ひとりが優れた資産

富山県知事

石井隆



さん

地域社会のあり方

ユニバーサルデザインについてどのようにお考えでしょうか。

石井「バリアフリーに近い部分もありますが、もっと広い社会性をもった概念だと思います。人はみな、一人ひとりが尊い命をもって生まれてきたわけです。年齢や性別、障害の有無にかかわらず、それぞれの人が生きがいのある人生を送っていただきたい。そうしたことを実現しやすい地域社会をつくっていくことが行政のユニバーサルデザインではないでしょうか。

具体的な取り組みについてお聞かせください。

石井「私が就任したときにうれしく思ったのは、富山型デイサービスの存在です。住み慣れた地域にある民家で高齢者や障害をもつ人、小さな子どもたちが大家族のように支えあって生活しています。1993年に惣万佳代子さんが始めた「このゆびとまれ」が

その先駆けです。県もそれまでの国の縦割り行政に沿った取扱いを改め、柔軟に助成や支援を行い、全国に誇れる新しい福祉のかたちとして普及に努めてきました。まず、特区として認められ、県内外に普及していく、遂に昨年、国の制度になりました。

富山県でも核家族化は進んでいます。今でも全国でみると三世代の同居率が高い。私が子どもの頃は、大家族の家が多く、みな自立しながらも支えあうのが当たり前でした。そうした富山県の良さが活かされているのだと思います。

ケアネット活動も地域で支えあう福祉の取り組みです。小学校区を単位として、2006年には県内76地区で子どもから高齢者まで支援が必要な人々を、地域住民と保健、医療、福祉の関係者が一体となって見守り、日常生活の支援を行っています。氷見市のケアネット活動は、買い物の代行やゴミ出し、話し相手など、近所づきあいが基本です。そして、一人暮らしで体調が悪い高齢者が出るとすぐ病院に連絡を取る。閉鎖的にならず、開かれたかたちで支えあうことがこれからの地域社会のあり方のように思います。

子どもの安全については、「富山県安全なまちづくり条例」を2005年に制定しました。富山県の特長は自治体や町内会が熱心なこと。子どもは地域の宝ということで、2005年度中にすべての小学校区に学校安全パトロール隊ができました。PTAや自治会、老人会、母親クラブが主なメンバーです。ほかにも「安全なまちづくりセンター」を地区ごとに設置しています。既存の公民館などに連絡先を設けて、人と人とのネットワークで運営する仕組みです。必要経費としてスタート時から2年間各地区に5万円を支給する

いしい たかかず●1945年生まれ。1969年東京大学法学部卒業後、自治省入省。静岡県総務部長、自治省大臣官房審議官、同税務担当審議官、同財政担当審議官、同税務局長、総務省自治税務局長、消防庁長官、早稲田大学大学院客員教授、市町村中央職員研修所学長などを経て2004年、富山県知事に就任*



富山県の特長は自治体や町内会が熱心なこと。すべての小学校区にパトロール隊がある

ものづくりの伝統

富山県では、県民の視点に立った将来像として、「元気とやま創造計画」を掲げています。

石井「まず、活力を生み出すことが大事です。その点、富山県にはものづくりの伝統がある。産業では自動車関連やロボット、医薬品が特に活発です。例えば、トヨタの海外を含めた工場全体で稼働しているロボットの約半分は富山の不二越の製品です。癒し系ロボットとして知られる知能システム社の「パロ」も富山で開発されたものです。一台35万円はしますが販売は好調です。県では、これをデイケア施設や保育園に置いてもらい、高齢者や障害をもつ人、小さな子どもの癒しに活用してもらっています。今後は、産業用に加え、介護の現場を支援したり、心を癒すロボットを富山の売りしていきたいですね。

高岡銅器や漆器も含め、いろいろな製品をつくる場合、機能性に優れているだけでなく、美しいとか、うるおいがあるとか、人や環境にやさしいといったことが大切です。富山県には全国でも珍しい総合デザインセンターがあり、所長にはソニーでウォークマンを開発した黒木さんが就任しています。毎年開催するデザインフェアには全国のデザイナーが参加し、そのなかから機能的かつ環境や高齢者・子どもにやさしいなど、優れた製品が次々と出てきています。県は、富山プロダクツとして優れた製品を認定・推奨し、支援す



産業では自動車部品やロボット、医薬品分野が特に活発。写真は最新鋭の製薬ライン (写真提供：東亜薬品株式会社)

る仕組みとされています。

また、2001〜2005年にかけてユニバーサルデザインコンテストも開催しました。生活の利便性を高めるとともに、デザイン面での種々のアイデアが商品化に結びついています。

歩いて通えるまちづくり

地方都市では車社会が問題視されています。まちづくりについてはいかがでしょうか。

石井―富山県では、一家に3台車があることがしばしばです。地価が安いこともあり、若い人々を中心にどんどん郊外に出る時期が過ぎました。結果、中心市街地の空洞化が進んでしまった。一方で、最近、免許があっても車に乗れない高齢者が続出しています。みな歩いて暮らせる範囲に魅力的な商店街をつくらねばなりません。そこで一昨年、国に対して中心市街地活性化法や都市計画法の改正を働きかけました。郊外での大型店舗の立地を都市計画の観点から規制できるようにしたのです。市町村だと領域に限界があるので、県が土地利用を一定程度調整できる権限を認められました。

大型店舗は品揃えが豊富で、広い駐車場を備えるなど、それなりに魅力があり一概に否定はできない。しかし、あまりに野放図に立地を認めるとまちなかの中心商店街が崩壊してしまいます。地域社会をうまく機能させるためには、何らかの土地利用上の規制が必要なのではないか。そこで、県民世論調査を行い、各界の有識者をメンバーとする「広域まちづくり商業振興懇談会」を一昨年設置し、議論を重ね、提言をとりま



県は富山プロダクトとして優れた製品を推奨。ユニバーサルデザインコンテストの受賞作品が商品化されている。「リングプラグ」もそのひとつ



お年寄りとバコのふれあい（富山県南砺市）



コンパクトシティは県民の健康づくりにも有効



海外の観光客に人気の雪の大谷。10m以上の巨大な雪の壁が圧巻



タウンミーティングでは知事が県民との活発な意見交換を行う

山連峰の「雪の大谷ウォーク」が人気で、昨年の外国人観光客は9万3000人に達し、3年で4倍になりました。県は5カ国語表記の観光案内の設置や、語学研修の支援などを行っています。

観光業や地域の人々も努力しています。高岡には国宝瑞龍寺や大仏などの観光資源がありますが、海外からの観光客にとって由緒や歴史がわかりにくい。そこで市民ボランティアにこれまで以上に活躍していただくため、県は中国語や韓国語などの研修会を無料で行っています。去年のタウンミーティングでは、もっと語学研修の機会を増やしてほしいという熱心な意見が出ました。県民のみならず、観光振興を旅行代理店や旅館・ホテルだけの問題ではなく、自分たちの地域をいかに振興していくかという問題として捉えて下さっているのが嬉しいですね。

観光振興のためにも、本県では県と民間が連携、協



「布橋灌頂会」。白装束の女性が魂の救済を求めて布橋を渡る

とめました。

われわれが声を上げたことなどに対応して、経済産業省と国土交通省が法改正を行い、郊外に1万㎡を超える大型店舗などの立地について一定の規制ができるようになりました。一方、市町村は、中心市街地活性化法が求める基本計画を内閣府に提出して認定を受けると、まちづくりにかかわる助成等を重点的に受けられることになりました。国が求める中心市街地活性化の基本コンセプトは「コンパクトシティ」。少子高齢化社会に対応する「歩いて暮らせる、にぎわいのあるまちづくり」をめざすものです。今年2月、富山市が青森市と並んで第1号の認定を内閣府から受けました。これまで、県の助成も受けてライトレールや中心市街地の活性化のための種々のプロジェクトを推進しています。

まちなか居住の推進やライトレール等の鉄道の整備を柱とするコンパクトなまちづくりは、地球環境や健康づくりにも貢献します。県内の公立体育館数は全国3位なのですが、ウォーキングなど運動習慣をもつ人は全国平均の3分の2程度と低いのが現状です。タバコを買いに行くのも車を使う人が多い。つまり、歩いて通えるまちづくりは、一石二鳥の効果をもつわけです。

観光振興とまちおこし

観光も重視していますね。

石井―今までの観光振興は、国内に目が向いていました。しかし、最近は台湾や韓国、中国からたくさん観光客が来ています。特に立山黒部アルペンルートや立力して、富山の歴史文化や自然の魅力を再発見、再生するための「越中ふるさとチャレンジ」を昨年からスタートさせました。いわゆる京都検定や金沢検定に近い側面もありますが、二番煎じにならないよう努力・工夫をしています。初回はおよそ3600人が受けました。順次中級、上級コースをつくる方向で検討が進められています。誰もが県外や海外の人に自分たちの歴史や文化、自然の魅力を説明できるようにしたいですね。

かつて、多くの山岳信仰が女人禁制だったなかで、富山地方には立山信仰という女性救済の行事がありました。した。「布橋灌頂会」と呼ばれ、姥堂川を人界と天界の境とし、そこに架かる布橋を渡ることで女性信徒も魂の救済を得られるというものです。地元では現在、この行事を本格的に復活させ定期的に開催することも検討されています。

最後に座右の銘についてお聞かせください。

石井―私の好きな言葉に天台宗の開祖、最澄の「一隅を照らす」があります。いろいろな解釈がありますが、私は「志ある人が一人で全体を照らすのは大変だが、多くの人々がそれぞれ身の回りを照らす努力をすれば、世の中全体が明るくなる」という解釈をしています。富山県民111万人がそれぞれの個性や能力を発揮し、自分に相応しい生き方をする。そのための仕組みづくりや環境整備をするのが知事としての私の役割です。富山県には、勤勉で進取の気性に富む県民性、ものづくりの伝統、先端的で多彩な産業、美しく豊かな自然風土があります。こうした資産を活かして富山県をもっと元気にしてまいります。